

第3章 現地調査

3.1. 植物調査

3.1.1. 調査概要

調査期日・調査項目など調査の概要を表 3.1-1 に示す。

表 3.1-1 調査概要

調査時期		調査時間	調査項目	調査員
冬	2005年12月5～7日	9:00～17:00	植生・植物相	3名
初夏	2006年5月31～6月2日		植物相	
夏	2006年8月10, 11, 14日			
秋	2006年10月18～20日			

3.1.2. 調査方法

表 3.1-2 及び図 3.1-1 に示す 9 箇所において、以下に示す調査を実施した。調査方法は概ね「平成 9 年度河川水辺の国勢調査マニュアル河川版(生物調査編)」に従った。

表 3.1-2 調査箇所一覧

区分	地区名	記号	地点名
陸域	元町	M-1	清瀧神社・大蓮寺・宝城院
		M-2	市役所周辺
		M-3	しおかぜ緑道
	中町	N-1	中央公園
		N-2	若潮公園・交通公園
		N-3	美浜公園・美浜運動公園
	新町	S-1	墓地公園
		S-2	高洲海浜公園
		S-3	明海の丘公園

3.1.2.1. 植生概観調査

調査箇所内の植生を相観により区分し、相観植生図²⁵を作成した。各植生区分について、群落高、階層構造、各階層の植被率²⁶、主要構成種を記録し、植生区分の根拠とした。

また、各調査箇所を横断または縦断する植生断面模式図を作成した。

3.1.2.2. 植物相調査

調査箇所全域を対象に任意踏査を行い、確認した植物の種名を記録した。主要構成種及び注目すべき植物種については個体写真を適宜撮影した。さらに、注目すべき植物種については、その生育位置、個体数、生育状況なども記録することとした。なお、注目すべき植物種とは、表 3.1-3 の①～④のいずれかに該当する種とした。

²⁵ 相観植生図: 植物の群落を群落を高木林、低木林、常緑、落葉、木本、草本といった外観により区分して作成する植生図。

²⁶ 植被率: 植物の葉群が地面を覆う比率。

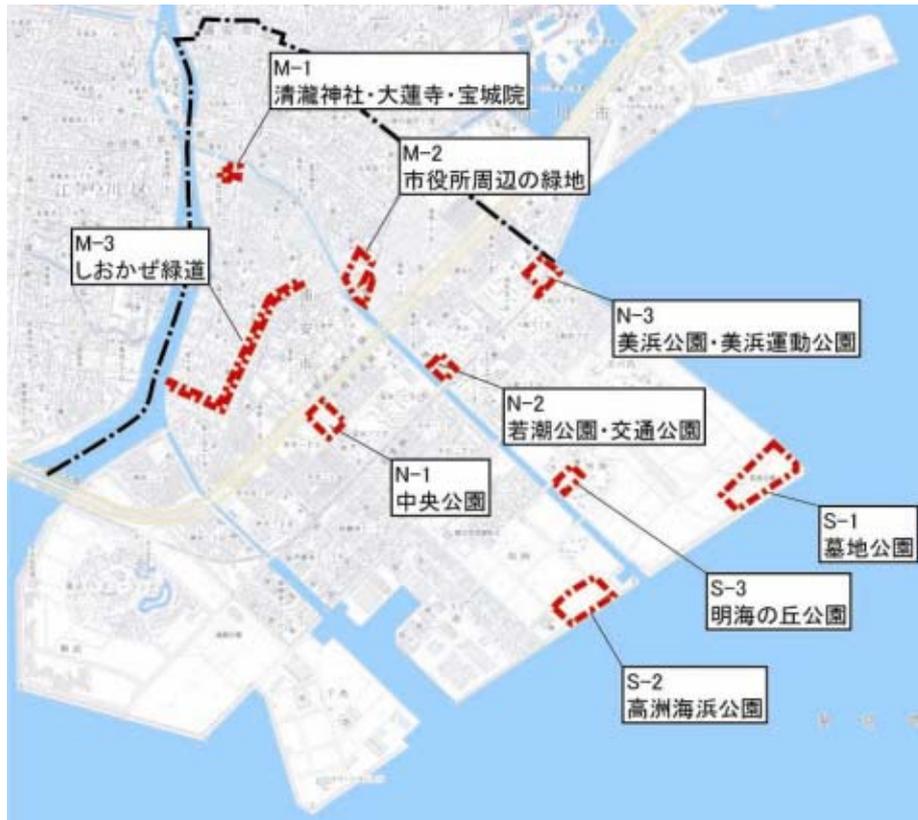


図 3.1-1 調査箇所位置

表 3.1-3 注目すべき種(植物)選定基準

資料名
①文化財保護法(1950, 法律 214)に基づく特別天然記念物及び天然記念物
②絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律(法律第 75 号)(環境省, 1992)に基づく国際希少野生動植物及び国内希少野生動植物
③改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物ーレッドデータブックー8 植物 I (維管束植物)(環境省, 2000)掲載種
④千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドリスト(植物編)<2004 年改訂版>(千葉県, 2004)掲載種

3.1.2.3. 市域を対象とした植物相調査

市域全域を対象に任意踏査を行い、調査箇所と同様の植物相調査を実施した。調査結果は確認した地区ごとにまとめた。



図 3.1-2 調査風景

3.1.3. 植生概況調査結果

現地調査により、調査箇所の植生を表 3.1-4 に示す 23 の植生区分(群落、土地利用区分などを含む)に区分した。表 3.1-4 には、各植生区分の特徴と確認箇所を記した。なお、各調査箇所の植生図及び植生断面模式図については、図 3.6-1～図 3.6-9 に示した。

3.1.3.1. 植生区分の考え方

本調査の対象となった調査箇所は、M-1(清瀧神社・大蓮寺・宝城院)を除いて全て都市公園であり、植生の主体(優占種)となっているのは多くは植栽起源の植物種であるとともに、現況で高度な植生管理下におかれている。このような緑地の樹林は、同じ林高の一般の樹林群落に比べ、階層構造や構成種の組成²⁷が著しく未発達である場合が多い。本調査の植生区分において、こうした構造、組成の点で著しく未発達な樹林については、区分名に「植栽地」という名称を用いた。これに対し、ある程度の階層構造、種組成の発達がみられる植生区分には「群落」の名称を用いた。

²⁷ 種組成:ある群落を構成する植物の種数の多さ。

表 3.1-4 植生区分一覧(1/6)

番号	植生区分／解説／確認地点	景観
1	<p style="text-align: center;">タブノキ群落</p> <p>タブノキの優占する高木林。本調査において確認した唯一の植栽起源でない高木林と考えられる。アオキ、シュロ、ヒサカキといった鳥散布型の樹種²⁸の被度が高いなど、都市型樹林の特徴はみられるものの、構造、組成とも市域で最も樹林らしい植分である。</p> <p>確認地点:M-1</p>	
2	<p style="text-align: center;">モウソウチク群落</p> <p>モウソウチクの高木林。かつて生活資材を得るために植栽されたものと考えられる。現在では植生管理されている様子はほとんどなく、構造的にはやや荒廃しているが、樹林としての構造と組成を有する数少ない群落である。</p> <p>確認地点:M-1</p>	
3	<p style="text-align: center;">クスノキ群落</p> <p>クスノキを優占種とする高木林。植栽起源ではあるが、林高は高い。植栽樹種からなる低木層もある程度発達がみられる。</p> <p>確認地点:M-2</p>	
4	<p style="text-align: center;">落葉広葉樹高木群落</p> <p>ケヤキが優占するが多いが、ほかにユリノキ、スズカケノキの仲間、ハリエンジュなどさまざまな植栽の落葉樹を混生する高木林。植栽されてからの期間が長く、林高が高い。また、構成種の多くは植栽樹種ではあるものの、階層構造の発達もある程度認められる。</p> <p>確認地点:M-2, N-2</p>	

²⁸ 鳥散布型の樹種:鳥類が果実を摂食し、糞に混じって種子が散布される樹木植物。鳥類の移動能力を借りて市街地の孤立した植分へも容易に分布を広げられるため、都市の樹林に高頻度で見られる。

表 3.1-4 植生区分一覧(2/6)

番号	植生区分／解説／確認地点	景観
5	<p style="text-align: center;">ケヤキ群落</p> <p>ケヤキの巨木が優占する高木林。神社の境内など歴史のある立地にみられる。よく植生管理されているため、階層や組成の点ではほとんど評価できないが、高木層を構成するケヤキは古く、十分な樹高と堂々たる風格を持つ。イチョウを混生する場合が多い。</p> <p>確認地点:M-1</p>	
6	<p style="text-align: center;">常緑樹亜高木群落</p> <p>マテバシイやクロマツの優占する植栽起源の亜高木林。優占種のほかに、スダジイ、シラカシ、タブノキ、ヤマモモ、ウバメガシなど、多様な常緑樹が混植されている。階層構造はあまり発達していないが、構成樹種は多岐にわたり、本来の植生に近い組成である。</p> <p>確認地点:N-1, N-2, N-3, S-1</p>	
7	<p style="text-align: center;">植栽低木群落</p> <p>常緑樹を主体に、高木となる樹種を密植した低木林。成長の早いサクラ類やアキニレなどの落葉樹にやや遅れて、タブノキ、マテバシイ、モチノキ、スダジイ、ヤマモモ、カクレミノなどの常緑樹が生育する。発達して常緑樹亜高木群落に移行していくと考えられる。</p> <p>確認地点:S-2</p>	
8	<p style="text-align: center;">先駆性低木群落</p> <p>草地を放置した結果として自然に成立する、先駆性の木本²⁹(クロマツ、ナワシログミなど)が優占する低木群落。群落高は高くないが、植栽地よりも組成的に発達している。</p> <p>確認地点:S-1</p>	

²⁹ 先駆性の木本: 草地が樹林へと遷移していく過程で最も早く草地へ侵入する木本植物。日当たりの良い立地を好み、乾燥に比較的強く、成長が早いといった特徴を持つ。

表 3.1-4 植生区分一覧(3/6)

番号	植生区分／解説／確認地点	景観
9	<p style="text-align: center;">クロマツ植栽地</p> <p>クロマツを植栽した低木～亜高木林。普通、低木(または亜高木)層と草本層の2階層からなり、クロマツの優占度が高い。一般の植栽地より草本層の植被率が高く、組成的にも比較的発達している場合が多い。</p> <p>確認地点:M-3, N-1, N-2, N-3</p>	
10	<p style="text-align: center;">サクラ植栽地</p> <p>おもにソメイヨシノを植栽した亜高木林。サクラ類の優占度が高い。林床は人間活動による干渉(おもに行楽)が多いため、階層構造が認められず、踏み固められて植被率も低い場合が多い。</p> <p>確認地点:M-3, N-1, N-2, N-3</p>	
11	<p style="text-align: center;">その他の樹木植栽地</p> <p>植栽樹種(クロマツ、サクラ類以外)の優占する低木～亜高木林。優占種はアケボノスギ、マテバシイ、クスノキ、アメリカデイゴ、ヤシ類、ヒノキ、カイヅカイブキ、トウネズミモチなど多岐にわたる。明確な優占種のない場合もある。ある程度の樹高を有する場合もあるが、組成は単純で、階層構造の発達もみられない。</p> <p>確認地点:M-1, M-2, M-3, N-1, N-2, N-3, S-3</p>	
12	<p style="text-align: center;">疎らな樹木植栽地</p> <p>芝地に疎ら(植被率:5～10%)に樹木が植栽された樹木植栽地。広い公園にみられる。組成的にはシバ群落にわずかな植栽樹種が加わった程度であるが、公園緑地らしい景観を創出する。</p> <p>確認地点:M-2, S-2, S-3</p>	

表 3.1-4 植生区分一覧(4/6)

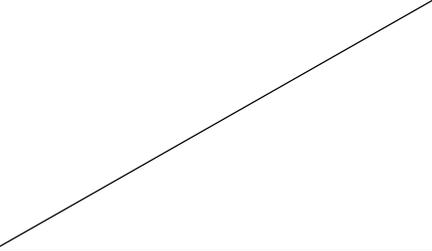
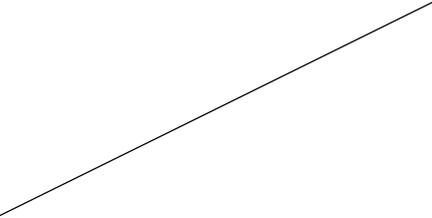
番号	植生区分／解説／確認地点	景観
13	<p style="text-align: center;">植え込み植栽地(大型)</p> <p>高さ 0.8～1.5m 程度の灌木が密に植栽された植え込み。優占種はオオムラサキが多いが、ほかに、サツキ、イヌツゲ、ウバメガシ、レンギョウ、ニシキウツギなどがある。灌木の密度が高いため、草本層の植被率は高くない。</p> <p>確認地点:M-2, N-1, N-2, N-3, S-3</p>	
14	<p style="text-align: center;">サツキ植栽地</p> <p>高さ 0.3～0.5m 程度の灌木が植栽された植え込み。優占種はサツキであるが、ほかにマメイヌツゲなどを混生する場合がある。サツキが疎らな場合は草本層にシバなどを伴う。</p> <p>確認地点:M-2, M-3, N-2, S-1, S-2</p>	
15	<p style="text-align: center;">ヒメガマ群落</p> <p>ビオトープの水辺に植栽されたヒメガマの優占する高茎の抽水植物群落³⁰。本来は休耕田やため池の淵など農村の水辺に成立することが多い。</p> <p>確認地点:S-3</p>	
16	<p style="text-align: center;">高茎多年草群落</p> <p>丈の高い(1～2m 程度)多年草群落。優占種はクズ、セイタカアワダチソウ、ススキ、ヨシなどで、造成後、しばらく放置された土地などにみられる。</p> <p>確認地点:M-2, S-1</p>	

³⁰ 抽水植物群落:水中に根を張り、空中に葉を広げる植物の群落。

表 3.1-4 植生区分一覧(5/6)

番号	植生区分／解説／確認地点	景観
17	<p style="text-align: center;">低茎多年草群落</p> <p>丈の低い(0.1～0.5m 程度)多年草群落で、チガヤ群落、コヌカグサ群落、オオバコ群落などを含む。チガヤ群落は年 2 回程度の刈り取りといった緩やかな植生管理下、日当たりのいい草地に成立する。コヌカグサはレッドトップなどの名で植栽された草地である。オオバコ群落は踏みつけの多い立地に成立する。</p> <p>確認地点:M-1, M-3, N-1, S-1</p>	
18	<p style="text-align: center;">水田雑草群落</p> <p>ビオトープに作られた水田耕作地の水生植物群落。本来水田には栽培種のイネのほかに、小型の湿生一年草が水田雑草としてみられるが、組成的に水田雑草らしい種はあまりみられない。</p> <p>確認地点:S-3</p>	
19	<p style="text-align: center;">ケナフ植栽地</p> <p>紙の材料となるケナフを実験的に栽培する耕作地。植被率は低く、小型の一年草を雑草として伴う。栽培種のケナフ以外は一般的な畑作地の組成を持つ。</p> <p>確認地点:S-2</p>	
20	<p style="text-align: center;">シバ群落</p> <p>植栽のシバが優占する植被率の高い低茎草本群落。シロツメクサ、セイヨウタンポポ、ハルジオンといった外来種を伴う場合が多い。</p> <p>確認地点:M-2, N-1, N-2, N-3, S-1, S-2, S-3</p>	

表 3.1-4 植生区分一覧(6/6)

番号	植生区分／解説／確認地点	景観
21	<p style="text-align: center;">花壇など</p> <p>パンジー、マリーゴールド、サルビア類など観賞用の花卉類を栽培する花壇。植被率は低く、一般的な畑地に生育する小型の一年草を雑草として伴う場合が多い。</p> <p>確認地点:N-1, N-2, N-3</p>	
22	<p style="text-align: center;">人工裸地・建物・舗装面</p> <p>建物、舗装面など地面を覆う構造物のある立地や、植被のほとんどみられない更地など。</p> <p>確認地点:全地点</p>	
23	<p style="text-align: center;">水域</p> <p>庭園の池や人工の水路など。</p> <p>確認地点:M-1, M-2, M-3</p>	

3.1.3.2. 概況

注目すべき樹林群落としては、元町の大蓮寺(M-1)で確認したタブノキ群落とモウソウチク群落が挙げられる。タブノキ群落はごく小規模な植分³¹であるが、かつて市域周辺に広がっていたイノデータブノキ群集の希少な残存植分であると考えられる。モウソウチク群落は植栽起源であるが、樹林群落としての構造と組成を持つこと、竹類を生活に利用していた頃の生活文化を伝える植分であることなどから、市域では貴重な植分といえる。

タブノキ群落と、先駆性³²低木群落以外の樹林はすべて植栽起源であるが、起源の古いケヤキ群落は注目に値する。また、多様な在来の常緑樹で構成され、まとまった面積を持つ常緑広葉樹亜高木群落は、管理の在り方によっては、やがて、かつてのイノデータブノキ群集や、沿岸域の防風林に似た環境を提供する可能性のある植分である。

先駆性低木群落は遷移の一過程としてみられるもので、放置すればいずれ常緑樹林へと発達するものであるが、造成中の公園緑地内でのみ確認しており、その発達を待たずに改変される可能性が高い。

樹木植栽地では、沿岸の防風林を思わせるクロマツや、春の行楽に欠かせないサクラ類の植栽地が最も多いが、そのほかにも多様な樹木の植栽地を認めた。これらの植栽地は視覚的に市域の緑被率を増大させる効果があるが、構造、組成の点で未発達であり、自然環境としての評価は群落類に比べて低い。

草本植生は大半がシバ群落であり、それ以外の植生の立地は限られていた。

ヒメガマ群落と水田雑草群落は、農村の景観を構成する重要な要素である。本調査においての確認は明海の丘公園(S-3)のピオトープに立地するごく小規模な植分に限られている。面積が狭隘なこと、造成後まもなく、同様の立地から隔離されているため本来の構成種の侵入に至っていないことなどから、組成的には十分に評価できないが、適正な植生管理により、より豊かな植物相を支える潜在力を持つ植分として期待される。

植生の概況

- ・ 浦安市の緑のほとんどは、人為的に整備されたものです。
 - ・ 神社やお寺には、起源の古い大きな木や林がみられます。
 - ・ 墓地公園や高洲海浜公園などでは、成長すれば昔広がっていたタブノキ林のようになることが期待できる林があります。
-

³¹ 植分:一定の組成をもった植物群落のまとまり。

³² 先駆性:植生が破壊されたあとの遷移の初期段階の早い時期に侵入・定着することができる性質。一般に明るく乾燥した立地環境に適応し、成長が早いのが特徴である。

3.1.4. 植物相調査結果(調査箇所以外を含む)

3.1.4.1. 概況(調査箇所以外を含む)

現地調査の結果、市域全体を通して、117科 544種類の植物の生育を確認した。確認種の一覧は資料編に示した。また、確認した544種のうち、257種(全573枚)の写真を撮影した。撮影した写真については、資料編に示した。

分類群ごとの確認種数を表 3.1-5 に示す。

表 3.1-5 確認種数一覧(植物)

分類群				科数	種数
シダ植物				8	14
種子植物	裸子植物			7	15
	被子植物	双子葉類	離弁花類	63	255
			合弁花類	22	131
		単子葉類		17	129
合計				117	544

文献調査によれば、隣接する市川市に生育する植物は 1,382 種、船橋市で 1,013 種である。調査回数や調査員の動員数の差を考慮しても、市域に生育する植物の種数は、両市に比べ圧倒的に少ない。

植物相の概況

- ・ 浦安市の植物の種数は、隣接する市川市や船橋市に比べて少ないです。
- ・ その背景としては、森や草原の面積が少なく、その種類も限られているためです。

3.1.4.2. 栽培植物の生育状況

生育を確認した植物のうち、227 種は栽培状態で確認した。これは、確認種の約4割となる。主なものを表 3.1-6 に示す。

表 3.1-6 栽培状態で確認した主な種(植物)

植栽種	逸出種	一部植栽種
ヤマモモ	イチョウ	クロマツ
サザンカ	マテバシイ	エノキ
アジサイ	クスノキ	タブノキ
ソメイヨシノ	モッコク	トベラ
ドウダンツツジ	シャリンバイ	ネズミモチ
サツキ		アズマネザサ
オオムラサキ		シバ

このうち 17 種で周辺への逸出³³を認めた(逸出種)。逸出種は、本来その場所には自生しない種類であるにもかかわらず、野生化して生態系を混乱させる可能性があり、注意が必要な場合があるが、今回の調査では特に憂慮される種は認めていない。

この他 58 種で栽培下以外での生育を認めた。これらは本来市域周辺で自生する可能性のある種であるため、野生する個体は自生個体とみなした(一部植栽種)。N-1(中央公園)、N-3(美浜公園・美浜運動公園)、S-1(墓地公園)、S-2(高洲海浜公園)などでは、植栽樹種の多くに、こうした本来生育すべき種を採用していた。これら一部植栽種にあたる植物種は、市域の植生や植物相を発達させるうえで高い効果が期待される³⁴。これらを除いた、野生化のみられない栽培植物は 152 種であった(植栽種)。

栽培種の生育状況(植物)

- ・ 浦安市に生育する植物の種数の約 4 割は栽培植物です。
- ・ 栽培植物のなかには、別の地域から持ち込まれたものもありますが、もともと生えていた種類も含まれています。
- ・ もともと生えていた種類を積極的に植えてる公園もあります。

3.1.4.3. 外来種の生育状況

生育を確認した植物のうち、116 種が外来種であった。確認頻度の高かった主な外来種を表 3.1-7 に示す。

表 3.1-7 確認した主な外来種(植物)

確認箇所数	種名
9	オランダミナグサ、コニシキソウ、タチイヌノフグリ、オオイヌノフグリ、オオアレチノギク、ヒメムカシヨモギ、ハルジオン、ウラジロチチコグサ、セイタカアワダチソウ、セイヨウタンポポ
8	エゾノギシギシ、シロツメクサ、コマツヨイグサ、トウネズミモチ、ハキダメギク、チチコグサモドキ、ヒメジョオン、ニワゼキショウ、イヌムギ、ネズミムギ、シマスズメノヒエ
7	アレチギシギシ、ハリエンジュ、コセンダングサ、アレチノギク、オノノゲシ

現地調査結果から算出した浦安市の帰化率³⁵は 29.6%である。一方、文献調査結果から算出される市川市、船橋市の帰化率はそれぞれ 23.7%、21.9%であり、植物相に占める外来種の多さが、浦安市の植物相の目立った特徴のひとつといえる。外来種の多くは陽地生で攪乱依存性³⁶の高い草本植物である。特に貧栄養、極度の乾燥、高頻度の人為的攪乱といった都市の環境に適応した種が多いことから、外来種の生育はこうした都市環境を反映したものといえる。

なお、N-2(若潮公園・交通公園)及び S-1(墓地公園)で確認したオオキンケイギク、M-2(市役所周辺)の緑

³³ 逸出:栽培された個体の繁殖体(種子など)から自然に発芽・定着し、野生化すること。

³⁴ 自生可能な種を植栽で導入する場合、遺伝的な攪乱を防ぐため、近隣で自生する当該種の種子から発生した苗を用いることが望ましい。

³⁵ 帰化率:ある地域の植物の確認種数に占める外来種の割合。ここでは、外来種数/(全確認種数-植栽種数)で求めている。

³⁶ 攪乱依存性:踏みつけ、刈り取り、除草剤の散布などといった、人間活動による干渉の多い土地に適応する性質。

地)で確認したボタンウキクサは、外来生物法³⁷に基づき指定された特定外来生物である。両種は 2006 年 2 月に新たに指定されるまでは、観賞用に栽培され、栽培環境から逸出した個体もしばしばみられたが、現在では生態系などへの影響が懸念されることから、輸入・運搬・譲渡・栽培などが禁じられており、今後の動態に注意が必要である。

外来種の生育状況（植物）

- ・ 浦安市の植物の帰化率は約 30%で、隣接する市川市や船橋市より高くなっています。
 - ・ 都市化がすすみ、本来生育する植物には住みづらい場所が多いことを示しています。
 - ・ 特定外来生物のオオキンケイギクやボタンウキクサは、周囲の生態系に悪影響を与える可能性があり、注意が必要です。
-

3.1.4.4. 自生種の生育状況

栽培植物と外来種を除いたものを自生種とした。本調査で確認した植物のうち、201 種を自生種として認めた。これらのほとんどは陽地生で攪乱依存性の高い草本植物(スギナ、スベリヒユ、オオバコ、メヒシバなど)であったが、そのなかには外来種に比べ、湿った環境に生育するもの(イヌタデ、ドクダミ、ツユクサなど)や、伝統的な農村のような緩やかな人為的攪乱のもとに生育する種(カニクサ、ミツバツチグリ、ナワシロイチゴ、ツボクサ、ヨモギなど)も含まれる。一方、樹林のほとんどみられない市域の自然環境を反映し、もっぱら樹林を構成する植物(ヒメイタビ、コゴメウツギ、ミズギ、ヒヨドリジョウゴなど)の確認はごく限られた。

自生種の生育状況（植物）

- ・ 浦安市に昔から現在まで生えている植物の多くは、畑や集落の周りなどもともと明るい場所に生えていた種類です。
 - ・ 林の林床のように、薄暗い場所に生える草花の種類数は、浦安市にはとても少ないです。
-

3.1.4.5. 注目すべき種の確認状況

注目すべき植物種に該当するものとして、環境省のレッドデータブック掲載種が 6 種、千葉県レッドリスト掲載種が 12 種、合わせて 14 種を確認した。種の保存法に基づく国内及び国際希少野生動植物、文化財保護法に基づく天然記念物及び特別天然記念物に該当するものは確認していない。抽出された 14 種のうち、

³⁷ 外来生物法:「特定外来生物による生態系などに係る被害の防止に関する法律」。2006 年 2 月現在、植物では、ナガエツルノゲイトウ、ブラジルチドメグサ、ミズヒマワリなど 12 種が特定外来生物に指定されている。特定外来生物が確認された場合には、その蔓延を防ぐための措置を講じることが望ましい。

12 種³⁸は栽培下での確認であり、自生の可能性があるのは、カワヂシャ及びキンランの 2 種、それぞれ 1 地点のみの確認であった。表 3.1-8 に 2 種の確認状況を示す。

なお、文献調査結果から抽出される、近隣に生育する注目すべき植物種は、市川市で 175 種、船橋市で 64 種となっている。

表 3.1-8 注目すべき種(植物)確認状況

カワヂシャ	
 	<p>ランク:「環境省 RDB」→NT(準絶滅危惧) 確認時期:冬季 確認位置:S-3(明海の丘公園) 撮影日:2005 年 12 月 7 日</p>
<p>現地調査では、冬季に S-3(明海の丘公園)において、1 個体を認めた。ビオトープ施工時に、意図的もしくは非意図的に導入されたものである可能性もあるが、周辺の環境(ビオトープ)が本種の本来の生育環境に近く、生育状態も良好であった。 本種は、ゴマノハグサ科の 1~2 年草で、田のあぜや小川、溝などの流水辺に生育する。千葉県レッドデータブックには掲載されていないが、好適な生育地が失われていることを背景に、環境省のレッドデータブックでは準絶滅危惧種³⁹に指定されている。</p>	
キンラン	
 	<p>ランク:「環境省 RDB」→VU(絶滅危惧 II 類) 「千葉県 RL」→D ランク 確認時期:初夏 確認位置:M-2(市役所周辺) 撮影日:2006 年 6 月 1 日(左) 写真提供:(株)環境指標生物(右)</p>
<p>現地調査では、初夏に M-2(市役所周辺)において、1 個体を認めた。その後、下草刈りなどの植生管理のためか、夏季調査では追認できなかったが、本種は多年草で、地下部が生存していれば、春季にはまた確認できる可能性がある。 本種はラン科の多年草で、本来丘陵地の植林や二次林のやや明るい林床に生育する。生育環境の減少を背景に、環境省をはじめ、多くの都道府県のレッドデータブックに掲載されている。</p>	

注目すべき種の確認状況(植物)

- ・ 絶滅のおそれがあるといわれている種類として、カワヂシャとキンランが見つかりました。

³⁸ 栽培下で確認した注目すべき植物種として、クマシデ、ウバメガシ、カツラ、ハマナス、イヌエンジュ、タチバナ、ホルトノキ、ヤマボウシ、アサザ、フジバカマ、コバギボウシ、シランが挙げられる。各種の選定理由、確認箇所については、資料編の確認種目録に記述した。

³⁹ 準絶滅危惧種:存続基盤が脆弱な種。現時点での絶滅危険度は低いですが、生息条件の変化によっては絶滅危惧種へ移行する危険性を有する。

3.1.4.6. 各地区の植物相

表 3.1-9 に、地区別の確認種数を示した。全体として目立った違いはみられないが、各地区の確認種数は、元町で 374 種、中町で 342 種、新町で 332 種となっており、内陸(歴史が古い)ほど確認種数が多い傾向がある。その内訳をみると、元町では、植栽種、逸出種、一部植栽種、自生種で他の地区より確認種数が多いが、外来種は少なくなっている。一方、確認種数の一番少なかった新町地区で、外来種確認種数は最大となっている。

元町地区は浦安市ではもともと陸地であった唯一の地区であり、土壤環境が比較的残されていること、神社や寺院などに古くからの環境が断片的ながら残されていることに加え、新しい種の供給源である市川市、船橋市などに地理的に近いことなどが、出現種数が多い要因として挙げられる。一方、帰化植物は種子の供給量や移動能力に長け、遠くまで伝播する能力が高い種が多いことに加え、未成熟な土壤、極度の乾燥といった、埋立地や造成地に特有の厳しい環境でも生育できるものが多いことが、確認種数の最も少ない新町において、外来種を最も多く確認している要因と考えられる。

表 3.1-9 地区別の確認種数一覧(植物)

分類群				元町	中町	新町
シダ植物				13	2	3
種子植物	裸子植物			10	9	8
	被子植物	双子葉類	離弁花類	179	163	149
			合弁花類	84	90	90
		単子葉類		88	78	82
外来種				82	78	87
植栽種				87	88	70
逸出種				15	15	12
一部植栽種				51	39	36
自生種				139	122	127
合計				374	342	332

各地区の植物相の概況

- ・ 確認種数は元町地区で最も多く、新町地区で最も少なくなっています。
- ・ 外来種の確認種数は逆に、新町地区で最も多く、元町地区で最も少なくなっています。
- ・ 外来種は厳しい環境でも生育できるものが多いため、埋立てから間もない新町地区で多くなっています。

3.1.4.7. 植物相の季節変化

調査季節別の確認科・種数を表にまとめた。季節毎の種数の大きな変化はみられないが、冬季の調査でも他季節と比較して遜色のない種数が得られる点は、温暖な浦安市の気候を反映している。

表 3.1-10 季節別の確認種数一覧(植物)

	冬季	初夏	夏季	秋季
科数	104	87	94	96
種類数	395	295	278	315

冬季調査では、晩秋遅くまで枯死しない植物と、早春季に活発に活動を始める植物の両方を確認したため、種数が多くなった。とくに冬季に特有な種類はみられないが、多くの夏緑植物⁴⁰は休眠状態に入るため、公園などに植栽された常緑樹群が目につきやすい季節である。また、ツバキ類、ウメ、ジンチョウゲなど、冬季から早春にかけて開花する植栽の花木類が冬景色にわずかな彩りを添える。

初夏調査では、同定に好適な状態まで成長していない種類が多いため、確認種数はやや少なくなるが、ナデシコ科、アブラナ科、ゴマノハグサ科、シソ科などにみられる冬雑草⁴¹といった、この時期に特異的に出現する種を多く確認した。また、夏以降も生育しているものの、初夏に出穂する一群のイネ科植物も、この時期が最も目につきやすい。同様に、サクラ類、ツツジ類、アジサイ類などに代表される植栽の花木類の多くが開花期を迎えるため、この時期は一年で最も植物が変化に富み、華やかな季節である。

夏季調査では、特に夏季特有の種類はみられないが、初夏には成長が不十分で種の同定に至らなかった種類が、初夏に特有な種群に代わって登場してくる。浦安市では、特に南方にその起源や分布の中心を持つ雑草がこれにあたる。一方、夏季に開花する植栽の花木類は、春～初夏に比べて数は少ない。

秋季調査では、秋季に開花・結実するイネ科植物、キク科植物などの一部、ヒユ類、カヤツリグサ類が確認適期を迎え、秋季特有の植物相を構成する。なお、この時期に開花する植栽花木類としては、ハギ類、キンモクセイなどが挙げられる。また、ピラカンサ類などは無数の実を付けて目をひく。

⁴⁰ 夏緑植物:春から秋の間に葉を付け、冬は越冬器官を残して枯れる植物。

⁴¹ 冬雑草:秋季に発芽して越冬し、早春から活発に成長して開花・結実し、初夏～夏には枯死する生活史を持った小型の一年草。

表 3.1-11 各季節に目立つ種(植物)

	植栽木	雑草
冬～早春季	常緑樹 クロマツ、マテバシイ、シラカシ、タブノキ、モッコク、トベラ、ユズリハ、モチノキ この時期開花する花木類 ヤブツバキ、サザンカ、ジンチョウゲ、ウメ	—
春～初夏	この時期開花する花木類 ソメイヨシノ、ユキヤナギ、アセビ、シナレンギョウ、ハナミズキ、サツキ、シャクナゲ類、ハナゾノツクバネウツギ、ハコネウツギ、ガクアジサイ	冬雑草 オランダミミナグサ、ミドリハコベ、ツメクサ、ナズナ、ヤハズエンドウ、オオイヌノフグリ、ホトケノザ この時期出穂するイネ科植物 カモジグサ、ヒメコバンソウ、イヌムギ、カモガヤ、オニウシノケグサ、ネズミムギ、ナガハグサ、ヒエガエリ、ナギナタガヤ
夏季	この時期開花する花木類 フヨウ、ムクゲ、サルスベリ、キョウチクトウ	成長開始の遅い南方系の植物 クワクサ、オシロイバナ、スベリヒユ、ヒナタイノコズチ、ヤハズソウ、エノキグサ、コニシキソウ、オヒシバ、コスズメガヤ、ヒメクグ、ハマスゲ
秋季	この時期開花・結実する花木類 ヤマハギ、キンモクセイ、タチバナモドキ、トキワサンザシ	この時期に開花・結実する植物 イヌビユ、ホソアオゲイトウ、ホウキギク、イガオナモミ、メリケンカルカヤ、ヌカキビ、チカラシバ、キンエノコロ、カゼクサ、ユメノシマガヤツリ、コゴメガヤツリ、カヤツリグサ

植物相の季節変化

- ・ 冬には特別な植物はみられませんが、常緑樹の存在感が増します。
- ・ 春から初夏にかけては、多くの草や木が順番に花を咲かせ、刻々と風景を塗り替えていきます。
- ・ 夏には特別な植物はみられませんが、南方系の植物はこの季節から目に付くようになります。
- ・ 秋には秋に開花・結実する植物が観察できます。